

自己意識的感情での移行についてのノート¹⁾

菊池 章夫*・今 洋子**

Notes on the shift of self-conscious affects

Akio Kikuchi and Yoko Kon

要 旨

共感を含めての自己意識的感情の特質の一つに、複数のこの種の感情がある状況ではほぼ同時に体験されるということがある。ほぼ同時というのは、こうした感情体験がきわめて短時間の間に急激に移行することでもある。ここではこの問題について、多次元の対人感情尺度 (Ko-MulDIA : 今, 2006) で測定される共感疲労・共感的苦痛・共感の過剰喚起・個人的苦痛の4種類の感情の間での移行の関係を、大学生と看護師とのデータを比較することで考察した。大学生群と看護師群とでは移行の関係に違いがあり、特に共感疲労と共感的苦痛との間でその違いがはっきりしていた。また、看護師群のほうが4つの下位尺度間の相関が高く、移行が頻繁に起きる可能性があることを示した。自己意識的感情での移行の研究は、今後の残された部分の多い領域といえる。

キーワード 自己意識的感情の移行 多次元の対人感情尺度 共感的苦痛 共感疲労 個人的苦痛

■ この感情の特質

TOSCA-3 (自己意識的感情検査-3 : Tangney & Dearing, 2002) は、恥と罪責感 (それに関心・責任逃れ) を測定するシナリオ形式の尺度として知られているが、その実施教示のなかに、

「…同じ出来事について、同時にいくつかの感じをもったり、いくつかの行動をし
りしますし、場合によっては同じ出来事にも別々の反応をします。…」

という記述がある。このことは、ある状況でいくつかの種類感情が同時に喚起されることを示していて、それが自己意識的感情の特質であることを述べたものといえる。同じことは、菊池・有光 (2006) の KA-JiKoKan (菊池・有光-自己意識的感情尺度/対人的負債感・個人的苦痛・恥・罪責感・共感的配慮・役割取得を測定する) では、

「…私たちはひとつの出来事について、いくつものことを感じたり・行動したりしま
すから…」

となっている。

この感情の特質に沿って尺度構成をするには、具体的なシナリオを示して、その場合にいくつ
かの感情や行動についてどの程度感じたり・行動したりするかを回答してもらうやり方がと

* 総合人間科学部 人間心理学科

** 社会福祉法人亮和会「サフラン工房」指導員

られる。上の教示は、このことを前提にして作られたものであり、TOSCA-3（短縮版）での項目の例は次のようになっている（カッコ内は測定する感情など）。

(5) ボール遊びをしていて、自分の投げたボールが友達の顔に当たってしまいました。

- a) 「ボールをちゃんと投げられないなんて、自分は無能力だ」と感じる。(恥)
- b) 「友達はボールをとる練習をもっとすべきだ」と考える。(責任逃れ)
- c) 「単なる事故だ」と考える。(無関心)
- d) 友だちに謝って、相手の気持ちが落ち着くようにする。(罪責感)

しかしこのやり方では、そこで用いる複数のシナリオ（その背景となっている状況）間での相関が低くなる可能性がある一方で、同じシナリオでとり上げる感情などの間での相関が高くなる傾向がみられる。ここまでの考えからすると、これは自己意識的感情の特質から生じたものといえるが、それだけでは済まないこともある。このことは、とり上げる状況の点からすると、その状況での適切な反応（感情規則）への敏感さが関係していると考えられる。一人ひとりの回答者の側から見ると、状況を越えて感情的に反応する傾向（感情的反応性）の個人差が問題である。

KA-JiKoKan を作成した際に、この尺度は弁別的妥当性が十分ではないとか、共感や個人的苦痛などの感情を個別に問題とした多くの尺度がすでにあるのといった批判があった。このことへの回答は、シナリオ形式が自己意識的感情の特質に見合ったものであるという言い方になる。そして、前者の弁別的妥当性については、上で見たような感情規則や感情的反応性の問題が残るといえる。後者の批判については、これまでに開発された尺度では他の関連する感情（恥と罪責感・共感と個人的苦痛など）との概念的な区別の検討が十分なされていないのに対して、KA-JiKoKan では、6種の感情などを同時に測定しようとすることでこの点の検討がされている、と答えることができる。

■ 共感はこの感情の仲間か？

ところで、以下では主に共感 empathy を中心に議論をすすめるが、この感情が自己意識的なものであることについてはコメントが必要である。これまでの研究の流れでは、恥や罪責感、個人的苦痛などの否定的感情が自己意識的感情の例として挙げられることが多く、プライドや高揚感などを除いては、肯定的感情がとり上げられることは少なかった。しかし、共感を喚起する手法として用いられている、

- ・ 他者注視的な／他人をイメージの教示（相手の立場になったらと考えて…）
- ・ 自己注視的な／自分をイメージの教示（このことが自分に起きたらと考えて…）

をくらべてみると、後者の自己注視的／自分をイメージの教示のほうが高い共感を生むことが知られている（ホフマン、2001；デイヴィス、1999）。ただしこのことには限界があって、この教示が過去に自分のした痛切な体験を想起させた場合には、相手に対する共感急激に弱められる。こうしたことはあるものの、このことを含めて、共感あきらかに自己とのかかわりで生じる自己意識的感情といえる。自己は、自分の感情や行動を認知したり・内省したり・評価したりする場合にその基準枠として作用している（菊池、2009）。そしてこうした自己の機能は、恥や罪悪感、プライドなどの他の自己意識的感情でも同じであると考えられる。

共感の概念そのものについては、多くの議論が積み重ねられてきている。例えば、共感には

認知的な面と感情的な面とが区別されているが、そのどちらをとり上げるかは研究者によって異なっている。認知的な面は役割取得とか視点取得と呼ばれてきた側面で、相手の立場に立って考えたり感じたりすることが重視される。これに対して感情的側面では、相手の気持ちと同じ気持ちになったり同情したりすることが問題とされていて、共感的配慮と呼ばれたりしている。この点について現在では、この二つの側面のどちらをも含めてとり上げる傾向になっているが、その際にもそのどちらにウエイトを置くかは研究者によって違いがある（デイヴィス、1999）。

このことと関連して、共感の中心には相手の感情とのマッチングが必要かどうかについても議論がある。共感を文字通りに「感情を共にする」ことだとすれば、このマッチングが共感の中心的部分といえる。しかし、いじめや攻撃にさらされている相手を見たときに生じる共感的怒りの場合のように、その相手が必ずしも怒っていない場合でも、その相手にいじめや攻撃を仕掛けている他者（第三者）に対する怒りは生じてくる。こう考えると、共感は感情のマッチングが見られる場合に限られるものではないことになる。

こうしたことを背景として現在では、共感は次のようなより広い概念として定義されることが多くなっている。

「他人の経験についてある個人がいだく反応を扱う一組の構成概念」（デイヴィス、1999）

「自分の置かれた状況よりも他人の置かれた状況に適した感情」（ホフマン、2001）

共感が「一組の構成概念」から構成されているとすると、そこには共感の認知的（視点取得など）・感情的（共感的配慮など）側面だけでなく、その周辺部にある個人的苦痛や共感疲労、共感の過剰喚起などをも含めて、いわば「共感関連感情群」（菊池、2009）として扱うのがよいといえる。そして、共感が「他人の置かれた状況に適した感情」だとすれば、相手のいざいっている感情とのマッチングがみられない場合をも含めて考える必要もある。以下の議論はこの2点を考慮に入れた方向でのものである。

■ この感情の移行

「同時にいくつかの感情をもったり」「いくつものことを感じたり」するのがこの感情の特質だとしたが、この言い方は必ずしも正確ではない。おそらく現実には起きていないのは、いくつかの感情の間でのシフト shift あるいはドリフト drift（いずれも移行であるが、前者が急激に起きるのに対して、後者は相対的にゆるやかに生じる）であろう。このことを問題にしてホフマン（2001）は、交通事故を自分のスポーツ・カーで起こして救急車で運ばれる若者を見た際に、ある大学院生がどのような感情体験をしたかを内省してもらっている。

ぼくが最初に思ったのは、お金持ちのうぬぼれ屋のガキが、酔っぱらったかクスリをやったかして運転していたのだろうということでしたから、彼には何の感情もちませんでした。／でも、こう考えるのはフェアじゃないと思いました。おそらく彼は急用のために急いでいたのでしょう。たとえば、誰かを病院に連れて行くとか。となると、ぼくはこの人に気持ちが向き始めました。／しかし、とぼくは考えたんです、言い訳は許されない。たとえ急用だとしても、彼はもっと注意すべきでした。そう考えると、ぼくの彼への気持ちは弱くなりました。／でも、彼が死に向かっていのかと思うと、再び彼のことで本当に心が痛みました。（訳書 p.121, /は引用者）

この1分間ほどの内省の間に、少なくとも4回の感情の移行がみられるが、それは重傷を負って病院に運ばれた若者の行動についての原因帰属の移行に伴ったものである。言い換えると、ここでは原因帰属の移行に応じて感情の移行が生じている。また、後での質問に答えてこの大学院生は、自分がいちばん最初に体験したのは「強い痛みのショックの感情」であり、それについて軽蔑的な帰属（「お金持ちのうぬぼれ屋のガキ…」）が生じたと述べている。そうだとすると、先に生じたのはショックの体験で、それにつづいて軽蔑的な帰属がなされている。

認知（原因帰属）と感情（軽蔑的な感情）との前後関係はそれ自体興味のある話題だが、ここで問題としたいのは1分間というごく短い時間の中に感情の急激な移行が生じていることである。そのなかには、ホフマンが利己的移行 egoistic drift と呼んだ、共感的苦痛から個人的苦痛への移行（2番目から3番目への変化）も含まれている。いずれにしても、自己意識的感情はそのいくつか「同時に経験される」というよりも、急激なシフトが起きている（あるいはこのことが繰り返されている）というのが現実に近いといえる。

■ Ko-MulDIA を使って

ここらあたりのことを考えるには、共感疲労 compassion fatigue は格好の話題である。この概念は当初は看護師教育の分野でとり上げられることが多かったが、その後は多くの対人援助職（医師やカウンセラー、教師、警官、消防士など）について問題とされてきている。その際の compassion は同情的苦痛・共感的苦痛に近い感情で、この感情が極度に強くなるとある時点から急激に相手を避けたり・意欲を失ったりする気持ちが起きる。この意味で compassion fatigue には、「同情疲労」とか「あわれみ疲れ」といった訳語を用いたほうがよいのかもしれない（ホフマン 2001 の訳書では「あわれみ疲れ」が用いられている）。

筆者の一人（今、2006）はこの概念に関心を持ち、それと同時にこのことに関連するほかの概念をもいっしょに測定する20項目・5件法の多次元的対人感情尺度（Kon-MultiDimensional Interpersonal Affects: Ko-MulDIA）を開発している。その際には、Figley（2000）や Figley & Stamm（スタム、2003）の共感疲労関連尺度を参照し、新たに加えた項目を含めた49項目についての因子分析がされている。その結果からこの尺度は共感疲労のほか、共感的苦痛・個人的苦痛・共感の過剰喚起（各5項目）をも測定するように構成されている。この尺度には看護師版（就職2年目の看護師の担当している5歳の難病の男の子が亡くなった）と消防士版（顔見知りの女の子を火事から救うのに失敗した）とがあるが、看護師版の項目の例は次のようである。

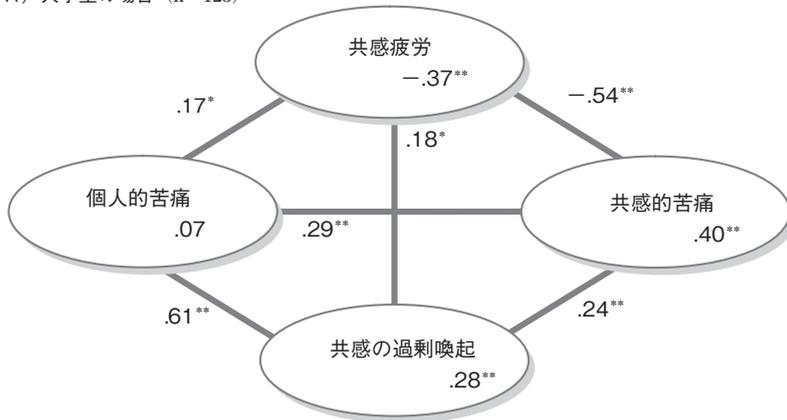
- ・共感疲労：なぜこの子の担当になったのかイライラする・どこかホットしているなど。
- ・共感的苦痛：あの子のことを繰り返し思い出す・もっとしてやれることがあったなど。
- ・個人的苦痛：無能な人間だと繰り返し思う・思い出すといつまでも落ち着かないなど。
- ・共感の過剰喚起：頭痛や吐き気に襲われる・ほかの患者さんに集中できないなど。

この項目に見るように、共感的苦痛は共感の感情的側面を、個人的苦痛は苦痛を感じている相手に接することから感じられるドキドキやイライラを、共感の過剰喚起は共感的苦痛があまりにも痛切で耐えきれない場合に生じる感情を示している。この Ko-MulDIA は、その信頼性や妥当性についてすでに検討がされている（今・菊池、2007）。

図1のAに示したのは123名の大学生にこの尺度を実施した結果をもとに、4つの下位尺度

間の相関係数 (r) を示したものである。サークル内に示したのは、大学生 75 名に実施した向社会的行動尺度 (大学生版：菊池, 1988) との関係で、妥当性の資料の一部である。この尺度は「あまり親しくない友人にノートを貸す」「バスや列車で、立っている人に席を譲る」などの 20 項目から構成されているが、共感の中心的部分である共感的苦痛 (.40**) や共感の過剰喚起 (.28**) とはプラス、共感疲労 (-.37**) とはマイナスの有意の相関係数が認められる。個人的苦痛とは有意の関係が見られないが、これはこの感情のはたらきが状況 (逃げやすさ・逃げにくさなど) によって違っていること (Batson, 1991) からきていると考えられる。

A) 大学生の場合 (n=123)



注) サークル内の数値は向社会的行動尺度 (大学生版) との相関 (n=75)

B) 看護師の場合 (n=109)

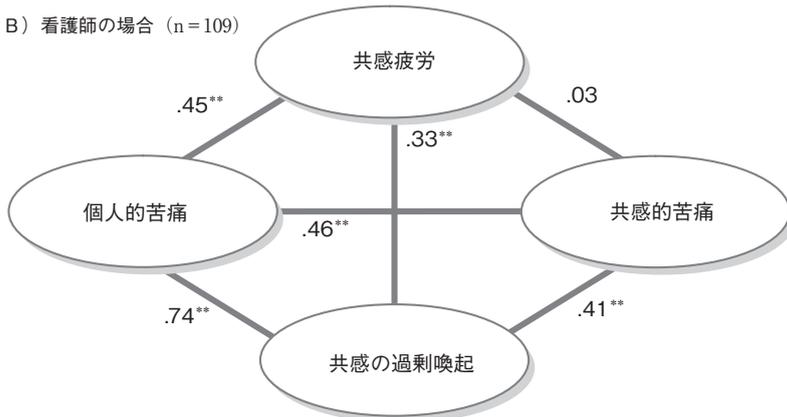


図 1 Ko-MulDIA の下位尺度間の相関係数 (r)

4 つの下位尺度間の関係については、個人的苦痛と共感の過剰喚起との間の有意のプラスの相関 (.61**) や共感疲労と共感的苦痛との間の有意のマイナスの関係 (-.54**) が特徴である。このほか、共感的苦痛と個人的苦痛 (.29**) や共感的苦痛と共感の過剰喚起 (.24**) でも有

意の関係がみられるが、共感疲労と個人的苦痛 (.17*) や共感疲労と共感の過剰喚起 (.18*) の間では、その相関関係は少ないといえる。こうしたデータは相関関係であって因果関係ではないから、直接に移行との関係を論じることはできないけれども、有意の高い相関関係では移行の可能性を考えることはできよう。個人的苦痛と共感の過剰喚起との間のプラスの関係は、この2種類の感情の間で移行が起きやすいことを推測させる（共感の過剰喚起は、共感的苦痛があまりにも強いために個人的苦痛に変換される場合に起きるとされている。／ホフマン 2001）。共感疲労と共感的苦痛との間のマイナスの関係は、一方の高さから他方の高さへ（また低さから低さへの移行）の移行が起きにくいことを予想させる。この場合に予想されることは、共感疲労の低さが共感的苦痛につながり、共感的苦痛の低さが共感疲労につながるという方向での移行（マイナスの移行）が起きる可能性である。

図1のBには、109名の看護師（年齢の平均 = 37.4歳・経験年数の平均 = 19.7年）に実施したデータから得られた相関関係を示した。個人的苦痛と共感の過剰喚起との関係 (.74**) は大学生の場合と同じであるが、共感疲労と共感的苦痛との関係 (.03 ns) は大学生群とは違って有意ではない。前者の関係については大学生群と同様の推測をすることができるが、後者の共感疲労と共感的苦痛の間には関係が見られない。このほかの関係 (.45**・.46**・.33**・.41**) はいずれも有意で、大学生群の場合よりもそのプラスの関係が密接である。大学生群ではその相関係数の絶対値の平均が .33 であるのに対して、看護師群では .40 になっている。

■ 感情移行研究の必要性

これまでみてきたデータが相関関係のデータであって因果関係のものではないことから、これ以上の一般化は慎まなくてはならないが、今後の研究の方向を探る意味で、いくつかのコメントを付けておきたい。大学生群では共感疲労と共感的苦痛との間にマイナスの有意の関係が見られたのに、看護師群ではこの関係は有意ではなかった。大学生群の共感疲労と共感的苦痛の間ではマイナスの移行（一方が低下すれば他方が高くなるという方向での移行）が生じる可能性があるが、看護師群ではそうではない。また、大学生群と看護師群とを比べると、4つの下位尺度間の相関関係は（共感疲労と共感的苦痛との関係を除いて）看護師群のほうが強くなっている。

- 1) この相関値の違いから、大学生群では相対的に移行が起きにくく、看護師群のほうで移行が起きやすいと考えられるが、このことはこの種の感情での移行がこの両群で違った機能をもっていることを示しているのかもしれない。もし仮に、移行の起きやすさを「切り替え」のしやすさと置き換えてみるとすれば、大学生群では切り替えが起きにくい、看護師群では相対的に切り替えが容易であると考えられる。別の言い方をすれば、大学生は当初の感情から抜け出しにくい、看護師はある感情から抜け出して別の感情へと移行ができ、そのことが結果的に適応的になる場合があるということがあろう。
- 2) この尺度を作った目的のひとつには、どのような感情状態のときにどのような介入をすれば効果的かを考え、そのためのプログラムを考えるということがあった（今・菊池, 2007）。今回の資料からはこの点について、大学生群と看護師群とではちがいがあることが示されている。大学生群ではある種の介入（自分の援助行動の効果を認知させることやサポート・グループへの参加）が直接に共感疲労を低下させ、共感的苦痛を高める方向で

の SCRIPT が作られている可能性があるといえる。これに対して看護師群でのこの種の介入は、共感疲労を低下させてもそのことが直接に共感的苦痛を高めることにはならないと考えられる。共感の過剰喚起や個人的苦痛をとおして共感的苦痛へという SCRIPT が、この場合には用意されているということであろう。いずれにしても、この種のプログラムは大学生群と看護師群とは違ったものになる。

- 3) このことを離れて自己意識的感情一般の移行について考える際には、ここで見たようないくつかの感情の間での短期的で急激な移行の繰り返しと、その先にある中期的な移行の暫定的な落ち着き、さらにはより長期的な移行の安定とを区別するのがよいのかもしれない。言い替えると、短期的な移行が繰り返されることの中で、次第に中期的な感情の落ち着きが生まれ、さらには長期的な感情の安定がみられることになろう。(移行について shift と drift というややニュアンスの違った表現がされているが、後者は中期的・長期的な移行を意味しているといえる。) この変化のどの時点でどのような介入をするのが効果的なのかは、これから問題とされるべき点である。

いずれにしてもこの目的にはまだはるかに遠いが、自己意識的感情での移行関係のことは、今後期待される未開拓の分野のように感じられる。ひとつの問題提起としたい。

(注)

- 1) このノートは、日本心理学会 72 回大会 (北海道大学) の自主シンポジウム「自己意識的感情：見逃されている側面」(菊池章夫・有光興記 企画) での問題提起 (菊池章夫「自己意識的感情でのシフトのこと」) に加筆したものである。

(文献)

- Batson, C. D. 1991 *The Altruism Question: Towards a Social Psychological Answer*. Erlbaum.
デイヴィス, M. H. (菊池章夫訳) 1999 『共感の社会心理学』川島書店
Figley, C.R. (ed.) 2000 *Treating Compassion Fatigue*. Brunner-Routledge.
ホフマン, M. L. (菊池章夫・二宮克美訳) 2001 『共感と道徳性の発達心理学』川島書店
菊池章夫 1988 『思いやりを科学する』川島書店
菊池章夫 2009 (印刷中) 共感関連感情群 菊池章夫・有光興記 (編) 『自己意識的感情の心理学』北大路書房
菊池章夫・有光興記 2006 新しい自己意識的感情尺度の開発 パーソナリティ研究 14 巻 2 号 137-148
今 洋子 2006 共感疲労に関する一研究 岩手県立大学大学院社会福祉学研究科・前期課程学位論文 (未公表)
今 洋子・菊池章夫 2007 共感疲労関連尺度の作成 岩手県立大学社会福祉学部紀要 9 巻 1・2 合併号 23-29
スタム, B. H. (編) (小西聖子・金田ユリ子訳) 2003 『二次的外傷性ストレス』誠信書房
Tangney, J. P. and Dearing, R. L. 2002 *Shame and Guilt*. The Guilford Press.

